

# 令和5年度 宇和中学校 第1学期学校評価 自己評価書

西予市立宇和中学校



## 1 学校評価の考察

### (1) 前年度（同時期1学期）との比較から

今年度の1学期末の結果と、前年度同時期の結果を比較した。

今回の回答数は、教職員は県費負担教職員数 35 名プラスその他の職員を合わせた「37名」、生徒は464名中「420名」、保護者は421世帯中「275名」であった。回答の集約状況は、教職員と生徒においては概ね良好だが、保護者の回答数が少なかった。「令和5年度第1学期学校評価アンケート」の教職員、生徒、保護者のそれぞれの質問の合計が上記の数「37名」「420名」「275名」に満たない項目は、回答における選択肢の中の「0：分からない」を選んだ者の数を除いているためである。

教職員のみ14の質問項目を設けた。生徒と保護者は13の質問項目とした。結果については、項目によってそれぞれ微増、微減はあるが、例年通りの傾向であった。全体的には肯定的な意見が多かった。教職員の評価において、質問項目14の「業務改善」に関する質問において、評価が低くなっている。校務を整理し、教職員一人一人が職場環境づくりに取り組んでいく必要があると考える。

### (2) 項目別；考察「令和5年度分」

#### ① 項目1（校訓のような生徒の育成）

教職員の評価が高く、校訓を意識した教育活動に取り組んでいる。その取組が、生徒の評価にもつながっている。今後も、様々な教育活動の中で、「心身を鍛え、自ら学び、つながりに生きる」場面を設定したり、ホームページや各種通信で、その取組や成果を紹介したりすることで、より高い成果を得ることにつなげていきたい。

#### ② 項目2（学校に行くのが楽しみ）

生徒、保護者ともに、肯定的な回答をした割合が9割近くとなっている。教職員の回答においても、肯定的な回答の割合が9割を超えており、概ね良好な状態と言える。ただし、不登校生徒数の増加が本校においては課題となっており、否定的な回答をした生徒に対する支援を継続していく必要がある。生徒が前向きに学校生活を送れるよう、工夫ある取組を継続していきたいと考える。

#### ③ 項目3（自主的な学習）

全ての質問項目を通して、肯定的な回答の割合が最も低かったのがこの項目3の質問であった。教職員から指示された学習については、まじめに取り組む生徒がほとんどであるが、自主的に学習に取り組むところまでは至っていない生徒もいるのが現状である。生徒に学習習慣を身に付けさせるとともに、学ぶ意義等を理解させるような指導にも力を入れて取り組み、主体的に学習に取り組む生徒を育成していくことが必要である。

④ 項目4（分かりやすい授業）

生徒の肯定的な回答の割合が95%となっている。教職員の肯定的な回答の割合も94%となっており、生徒が授業の内容を分かりやすいと感じる授業展開が行えていると考える。ICT機器を効果的に活用したり、話し合い活動を充実させたりし、生徒が「分かる」と実感できる授業の実施を継続していくとともに、生徒自らが主体的に学習に取り組む態度の育成にも力を入れていきたいと考える。

⑤ 項目5（充実した部活動）

生徒の肯定的な回答の割合が87%と三者の中では最も高く、概ね良好であると考えられる。今年度は19種類の部活動のうち、12種類の部活動において顧問が新しく変わるという事態が生じたが、それぞれの部活動に所属する生徒、保護者と良好な人間関係を構築し、部活動経営に取り組んでいると考える。ただ、部活動をめぐる保護者の要望や、生徒自身の耐性等に年々変化が生じているのも事実であり、部活動に対する不適応を生じる生徒も見られる。今後も指導方法や生徒への言葉掛けを工夫しながら、適切な部活動経営に努めていく必要があると考える。

⑥ 項目6（話を聞いてくれる）

全校生徒464名（南予で最も多い生徒数）の規模で、95%の生徒が肯定的な回答をしており、教職員と生徒の間に、良好な人間関係が構築されていると考えられる。教職員は様々な業務を抱えながらも、学級、授業、部活動等において生徒としっかり向き合い、生徒の話に耳を傾けていると考えられる。また、不登校傾向の生徒とも、継続的に連絡を取り合い、関係を保つことができている。「一人不捨」の精神のもと、「話を聞いてくれる」と感じる生徒が100%になるよう、今後も粘り強く、生徒の話に耳を傾けることに取り組んでいきたいと考える。

⑦ 項目7（命の大切さ）

肯定的な回答をした割合は、生徒が97%、保護者が91%、教職員が100%という結果になった。昨年度本校で行った人権・同和教育に関する研究実践の成果が、本年度も引き続き、教育活動に生かされていると感じさせられる。この結果に甘んじず、引き続き、命を大切に教育を推進していきたい。

⑧ 項目8（いじめ・トラブルへの対応）

生徒、保護者、教職員ともに、肯定的な回答をした割合が高いが、生徒の31名、保護者の39名が適切に対応できていないと感じているところが課題であると考えられる。特にいじめに関しては、被害者の立場に立ち、決して許される行為ではないという認識のもと、毅然とした態度で対応すべきである。職員会や校内研修において、教職員の意識統一を図るとともに、迅速かつ適切な対応に努めていきたい。

⑨ 項目9（分かりやすい情報発信）

生徒、保護者、教職員の回答ともに、概ね良好な結果となっている。引き続き、ホームページ、連絡アプリ（すぐる）、学級・学年通信、生徒指導通信、電話連絡、Google クラウドスライド等を用いて、スピード感を持った情報提供に努めたい。アンケートでの回答ではないが、ホームページにおける、行事及び部活動予定の更新を素早く行ってほしいという、保護者からの要望が数件あった。予定が確定したら素早く連絡できるよう努めていきたいと考える。

⑩ 項目 10 (いけないことをきちんと指導している)

生徒の肯定的な回答の割合が 98%、教職員が 100%と、高い評価であった。反面、保護者に関しては、肯定的な回答ではあるが、「3」の評価が 119 名、否定的な回答が 33 名と、生徒、教職員に比べると若干低い評価となっている。校内においては、教職員が共通の認識のもと、毅然とした態度で生徒指導等に取り組んでいると考えられる。今後、教職員の指導が、生徒自身の規範意識の向上につながるとともに、生徒が主体的にきまりの意義を考えたり、お互いに声をかけあいながらルールを守ろうとしたりする態度が身に付いていくよう、工夫ある取組を行っていききたい。

⑪ 項目 11 (挨拶)

生徒会を中心に、「あいさつ日本一」を目指した取組が充実しており、その取組が高い評価につながっている。近隣校の教職員や地域の方、また、仕事や旅行で宇和町を訪れた方から、宇和中生のあいさつを褒められる場面もあった。今後も、生徒が「させられるあいさつ」ではなく、「自ら主体的に行うあいさつ」を目指し、教職員、生徒が一丸となって、あいさつの向上に取り組んでいきたい。

⑫ 項目 12 (清掃態度)

生徒と保護者の肯定的な回答の割合において、昨年度の結果を若干下回った。教職員が担当場所に素早く移動し、生徒の清掃態度を見守り、良かった点や反省点を確認するという地道な取組を継続していききたい。また、今年度は「ふるさと学習」に力を入れて取り組んでおり、生徒が積極的に地域行事等におけるボランティア活動に参加する体制を整えている。日々の清掃活動やボランティア活動を通して、生徒の中に、奉仕の精神を育てていけるよう、粘り強く取り組んでいきたい。

⑬ 項目 13 (人権教育)

生徒、保護者ともに肯定的な回答の割合が高く、項目 7 でも述べたように、昨年度の取組の成果が表れていると考える。保護者の「人権に関する話を家庭ですることが増えた」という問いに対する回答については、若干低い評価となっている。今後、学校・学年だより等を活用し、身近な人権問題や教育上の諸問題についての情報提供をはじめ、人権参観日における授業の公開、参観後の評価アンケートの実施、人権をテーマとした講演会の開催等、家庭に向けた啓発活動の工夫を図っていききたい。

⑭ 項目 14 (業務改善)

昨年度同様、回答の平均値が 2.89 と、3 点台を割り込む結果になった。業務改善に前向きに取り組めない要因を分析・整理し、教職員の働き方改革につなげていきたい。特に、夜間遅い時間に及ぶ長時間労働については、何としても改善していきたいところである。まずは、業務内容や学校行事等、必要なものと不要なものを整理していききたい。コロナ禍における学校現場、教育活動の変容が、教職員の業務改善や効果のある学校づくりに生かされるよう取り組んでいきたいと考える。

## 2 具体的な今後の取組

### (1) 学校全体での取組（改善点の明確化、意識改革の必要性）

- ・ 生徒自身が、今日が楽しく、明日が待ち遠しいとすることができる学校づくり  
学校行事やふるさと学習等、工夫ある教育活動を通して、生徒がやりがいと充実感を得られるような学校づくりを目指す。また、きめ細やかな教育相談等の充実と、生徒同士がお互いの存在を大切にし、支え合うことのできる集団作りを行い、生徒の所属感の向上に努める。
- ・ 主体的な学習を促すための実践の工夫  
ICT機器等の活用により、分かりやすい授業の展開に努める。また、全国学力・学習状況調査や定期テスト等の結果を分析し、生徒自らが、主体的に学習に取り組めるよう、授業改善に取り組んでいく。併せて、宿題の質や量を見直す機会を設け、生徒の学力向上と主体的な学習態度の醸成につながる取組の在り方について検討する。
- ・ 家庭において、人権課題について話す機会を増やしていく工夫をする。

### (2) 学年部を中心とした「学校評価の考察と今後の取組」

#### <3年部考察>

- 項目2「学校に行くのが楽しみ」…授業や行事、部活動等何か1つでもいいので生徒が前向きに参加したいと思う活動があるとよい。
- 項目3「自主的な学習」…授業中の様子や宿題を見ていると、生徒は指示されたことを一生懸命こなそうとしている。継続して、やる気をもって活動できている生徒もいる。まだ、勉強の仕方を学んでいる途中の生徒もおり、分からないからできない部分はあると思う。
- 項目6「話を聞いてくれる」…教員サイドから、積極的に話しかけられるようにしたい。

#### →2学期に向けた戦略

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
  - 活動の工夫と仲間づくり（人間関係づくり）のサポートを行う。
  - 学習委員会集会のような勉強の仕方について学ぶ場を設けたり、テスト期間に行ったりリモートで質問を受け付けたりする活動を継続して行っていく。
  - 教育相談の時間はRAMPSの時間に充てられたので、2学期はいろいろな先生に相談をする機会を作れたらと思う。また、完全下校の時間の必要性は感じているが、ある程度フレキシブルに生徒が動ける雰囲気を作る必要性も感じる。放課後以外の時間の使い方を工夫することも視野に入れ、検討していく必要がある。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
  - 生徒対応の共通理解を図る。学年部会（連絡）を更に密にするとともに、学年集会を活用し、認めたり、指導したりする。学級担任が対応しきれない生徒は、スクールカウンセラーに繋いでいく。
  - 継続ノートの取組内容や提出方法の見直しをする。
  - 相談しやすい先生が担任の先生とは限らないので、学年部がチームとして動き、生徒がどの先生に相談しても構わないという安心感を得られるような、教員同士のチームワーク作りに取り組んでいく。

### < 2年部考察 >

項目 1 「校訓のような生徒の育成」…校訓を活かした学校づくりを成功させるには、教職員、生徒、保護者、地域が一体となって学校運営に取り組む意識を共有することが大切である。

特に、今年はコロナが明け、「つながり」を重視した取組を充実させるチャンスであると捉えている。

項目 3 「自主的な学習」…自分の、夢や目標を持つと、進んで勉強に向かうと考える。早期からの進路指導の充実を図る必要がある。

項目 13 「いけないことをきちんと指導している」…いけないことをきちんと指導することは大切だと思うが、今の時代子どもたちに合わせた指導も大切。自分がなぜ指導されているのかわからない生徒もいる。生徒の立場に立って指導することを心掛けたい。

#### → 2学期に向けた戦略

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
  - 「つながり」の部分では、1学期に結成した縦割のグループ編成をうまく活用していく。ふるさと学習、運動会、秋輝祭、清掃班など。
  - 継続ノートはやらされている感が強い。量や提出日を減らしていくと同時に、授業の中で生徒の理解度を上げていくことを目指す。
  - 生徒が保護者に学校での様子を話さないことが保護者の数値が低いことにつながっているかもしれない。生徒指導通信等を活用し、生徒指導に関する学校の方針や指導内容が保護者に伝わるよう工夫する。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
  - 2学期の運動会や合唱コンクールでは各クラスが競い合うが、最終的には、各クラス互いの健闘を称える場を設定し、互いに高めあう気持ちの醸成を図る。
  - 進路指導を進める上で将来の目標を早めに設定させることで、学習に対する自主性を高めていく。
  - 生徒指導をしたときには、学年部の教員で連携して取り組み、保護者への連絡をしたり、家庭の協力を依頼したりする。また、身だしなみ等について、生徒自らが考え調整していけるような雰囲気づくりに取り組む。

### < 1年部考察 >

項目 6 「話を聞いてくれる」…今年度は RAMPS を実施し、悩みがある生徒に時間をかけて話を聞くことができた。じっくりと話をする機会を持てたことで、普段の会話でも話しやすくなったり、本音を伝えてくれたり、生徒との距離が縮まった。反面、全員とは話す時間が取れず、少しでも生徒の話を聞ける体制がとれればよかった。

項目 14 「業務改善」…教材研究以外の事務的なことや学校行事等に時間がとられるので、ICT等の活用を通して効率化を図る必要がある。

#### → 2学期に向けた戦略；

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
  - 教育相談の数を多くする。部活動においても、生徒の様子をよく観察し、声掛けをしたり、生徒の意見に耳を傾けたりする。
  - 学校行事等見直し、必要に応じて簡略化を図る。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
  - 教育相談の際には、悩みがある生徒は学担が話を聞き、他の生徒は学年部の先生にも協力してもらい生徒全員が教師と話ができる体制づくりに努める。

- 学級担任は空き時間が少ない中で、毎日あゆみと継続ノートを見なければならず、負担も大きい。継続ノートのチェックなどは学年部の副担の先生方にも手伝ってもらおう等、業務の割り振りについて学年部内で工夫していく。